

永平寺町ビジョンガイドブック

ととのうまち永平寺町

福井県立大学 × 永平寺町
永平寺町学



学生が“ととのうまち永平寺町”からイメージする

77

の
ハッシュタグ・キーワード

自然

星が見える夜	自然が豊かな
きれいな星	森閑
美しい自然	緑がいっぱい
自然の恵み	自然で遊ぶ
鳥	木、水、光
清らか	澄んだ空気
自然	美しい自然
山と川	豊かさな自然
九頭竜川の鮎	畑
自然美	さかな
みどり	鮎つり
	カヌー

温もり

あふれる親切心
人の温かさ
おじちゃんおばあちゃん
思いやり
情
あたたかい
温もり
地域のぬくもり
みんな優しい
暮らしやすさ
子育て

伝統

伝統
古きよき
帰る場所
こだわりが強い
連なるそば屋
坂道
道が狭め

つながり

人とのつながり
近所での助け合い
人と人のつながり
おじちゃんおばあちゃんとの交流
世代をこえたつながり
地域の関わり
つどいの場
人と人との温かいつながり
田舎だからこそのつながり
あいさつ

革新

アップデート
挑戦
進化し続けるまち
成長し続ける
インスタ映え
おいしいプリン
夢がいっぱい
伸びしろ
生まれる
新鮮
やりがい

心落ち着く

禅のまち
悟りをひらく地
道をひらく
無
人生観を教えてくれる
心を落ち着かせられる場所
禅
心の浄化
空白
おちつく
静か
落ち着く場所
やすらぐ
静寂の地
自然の音を感じられる

ととのうまち永平寺町は、
豊かな自然に恵まれた伝統と革新のまちであり、
温もりあるつながりに溢れた心落ち着くまちだ。

永平寺町ビジョンガイドブック

福井県立大学と永平寺町が連携し開講する
「永平寺町学」

この授業を通じて、計18名の大学1年生が、
地域づくりのプロから学び、魅力的な人に
会いに、地域に飛び込みました。

できあがったのが、永平寺町の新しくて懐
かしいビジョン（まちの未来像）を掘り起
こし紹介するこの風変わりなガイドブック。

人から学び、若き学生視点から、永平寺町
における地域での暮らしを見つめ、その価
値の発信に挑みました。



新型コロナウイルスの先行きが不透明な中、世界各地で、自分たちが住む地域の幸せとは何か？と一度立ち止まり考える時を迎えている。学術的には、“身体的・精神的・社会的に幸せな状態”を「ウェルビーイング (Well-being)」と呼び、幸せな社会をつくっていくために世界中でウェルビーイング研究が盛んだ。

さて、それでは、永平寺町の幸せ・ウェルビーイングとは何か？と考えたときに、ずっと思い浮かんだのが「ととのう」という1つのキーワード。幸せのカタチには文化差があり、国が異なればそのカタチは異なり、地域が異なればそのカタチは異なる。この多様性こそが、土地に根付いた地域の美しさである。

日本においては欧米と比較して、個人による自己達成に基づく幸福感ばかりでなく、関係性に基づく幸福感を重視する傾向がある。自分と自分との関係性、自分と他人との関係性、自分と自然との関係性。この3つの関係性が、バランスと調和をもって、ととのっているとき。人は、自然と調和し、ともに手を取り合いながら、自分らしく生きられる。

日本には、ことさら永平寺町には、そんな「ととのう」という、懐かしくて未来的な幸福感があることを感じたのだ。“ととのうまち永平寺町”という地域ビジョンを放つまちであると。

このガイドブックでは、永平寺町を舞台に活動される9名の方に、あなたにとっての「ととのう」とは何か？と、学生がインタビューし記事にまとめ紹介する。永平寺町に根付く、多種多様な「ととのう」に出会い、皆様自身の幸せを考える1つのきっかけをお届けできれば幸いです。

contents

- 04-12 永平寺町ゆかりの9名への学生インタビュー
- 13 ビジョンガイドブック作成記録
- 14-15 私たちが考える“ととのう”とは
- 16 「ととのうまち永平寺町」の77個のハッシュタグ・キーワード

お客様に、最高の時間を

取り壊される予定だった旧志比郵便局の局舎を改築し、人々が気軽に足を運びフレンチを楽しむことができるレストランを営む近岡靖二さんにお話を伺った。



旧郵便局レストラン「ラ・ポスト」

赤い屋根「瓦とクリーム色の外壁が特徴的な「ラ・ポスト」。かつて訪れた南仏を彷彿とさせる外観に一目惚れし、「旧郵便局」にレストランを構えることを決意。一目見て郵便局と分かるように郵便ポストや看板は残してリノベーションした。「ラ・ポスト」という名前に関しては、「地域のおばちゃんたちが覚えやすく、カジュアルで親しみやすいレストランをイメージした」という。

店内には他にも旧郵便局の名残が。個室の床は築65年の床と電信盤の名残であるメモ刺しをそのまま使用している。また、昔の郵便局は奥行きが広い。近岡さんはその奥行きをのびのびと利用し、「店内を最後まで楽しんでもらうために旧郵便局の廊下をそのまま残し、一番奥にお手洗いを設置した」という。

家はいらない？

福井県出身の芳沢さん。県外の大学を卒業したあと、東京で会社員として働き、アドレスホッパー（定住する家を持たずに移動しながら生活する人々）としてゲストハウスを転々とする生活を送っていた。

「家っていらなくない？」

アドレスホッパーになった経緯をこのように語る芳沢さん。聞き手が思わずワクワクしてしまうような創造力と行動力こそ、芳沢さんの魅力なのである。

ポジティブシンキング

芳沢さんが常に色々なことに挑戦し続けられる理由は、失敗をポジティブに捉えることにある。失敗をした時にそれが自分に向いていないことが分かり、自分には他に向いているものがあるのではないかと考えるそう。芳沢さんの大きな転機となった東京での就職もこの精神が影響している。教員採用試験に落ちてしまったが、教員ではない人生も良いのではないかと考え、内定が決まっていた旅行会社に就職した。

ばあちゃんの家を守りたい

元々旅が好きだった芳沢さんはカブ（小型バイク）に乗って日本を一周し、世界も旅した。旅を重ねるにつれ、自分自身の手でゲストハウスを開きたいと思うようになったそう。

そこで白羽の矢が立ったのが、先祖代々受け継いできた吉峰集落にある祖母の家だった。合掌造りの屋根が特徴的な築140年の古民家である。

「茅葺の家に住みたかった」と教えてくれた芳沢さんだが、その裏には、「代々受け継がれてきた祖母の家を守りたい」「ゲストハウスから福井を盛り上げたい」という熱い気持ちがあった。

深いつながり、太い絆

芳沢さんは、永平寺町をはじめとした福井県のがりな「せまいつながり」と表現した。しかし、このつながりは、他には無い福井県の良さ、永平寺町の良さだという。

都会には見られない、ご近所さんとの深いつながり。そして強固な信頼関係。芳沢さんは、このつながりの中で魅力的、持続的な吉峰集落を目指す。

芳沢さんの「ととのう」

芳沢さんにとって「ととのう」とは、自分や身近な人たちが幸せであることだ。身近な人を幸せにすることで、自身も幸せになる。他者と協力し、みんなが幸せを感じられるような吉峰集落を創る。

「良い出会いと良いつながり」

芳沢さんが「ととのう」ために大切にしている言葉だ。

自家製へのこだわり

料理はすべて自家製の食材を使用。特にサラダコーナーの野菜はすべて実家・能登のお母様からの届いた物。大根だけでも6種類の種類を取り扱って調理する。その週によって送られてくる野菜は異なるため、様々なサラダメニューを楽しむことができる。パンやデザートもすべて手作り。お子様のアレルギーや甘さ加減に気を遣いながら、料理との相性を大切にしたいサイドメニューを提供している。

「ととのう」の「かんばん」

レストランでは、店内の掃除、料理の仕込み、スタッフの教育など、すべての工程がお客様の幸せな時間や楽しいひとときにつながる。お客様に美味しい料理と丁寧な接客で最高の時間を過ごしてもらうことがレストランの目的であるが、完璧にそれをやりこなすことは難しい、と近岡さんは話す。

「お客様に満足してもらおうという完璧な状態を目指し、試行錯誤を繰り返しながら進んでいく。その過程が料理をする上で面白いところ。とのえないからこそ努力できる」

「ととのう」まで、お客様のために努力を続ける近岡シェフのフレンチを、今度は味わいに伺いたい。



近岡 靖二

永平寺町にあるフレンチレストラン「ラ・ポスト」のシェフ。実家・能登で採れた新鮮な野菜などを使用し、こだわりの詰まった料理を提供している。

芳沢 郁哉

農家民宿の経営。永平寺町にある祖母の家をリノベーションし宿をはじめ。日本一周応援宿というテーマで旅人を応援している。



text：淡海尋斗、矢野 智士、山崎 伶馬

人間は環境とともにある

公衆衛生・社会医学の立場から自然療法の健康増進効果について研究する医師・ドイツ気候療法士・温泉療法専門医・産業医であり、気象予報士でもある福井大学医学部環境保健学教室・助教の金山ひとみさん。

自然療法との出会いから、大学での研究、そして永平寺町での気候療法の実践に繋がる話をうかがった。

気候療法。これは、普段過ごしている人工的環境を離れ、健康に良い影響を与えてくれる海や山などの自然の中に滞在し、ゆっくり休養したり、適度な身体活動等を行う「一種の転地療法である。」
彼女が自然療法に興味を持ったのは、福井医科大学の医学生時代。社会医学実習の自由テーマに選んだ「天然温泉の効用」で、富山医科薬科大学医学部保健医学教室で海洋深層水を使った実験研究がきっかけだ。医師になった二年後には、北海道大学阿岸名誉教授の引率で初めて渡欧し、自然療法を実際に学ぶ機会を得た。この時、気候療法の世界的権威であるミュンヘン大学のシウ教授と出会う。気象庁の予報現場で働いた経験を生かし、母校の医学部へ戻った後、恩師である日下教授の理解を得て、気象医学の実践である気候療法研究を開始した。



永平寺町には、格別の魅力がある
金山さんは永平寺町の環境に期待を抱く。欧州の医師や研究者も絶賛する大本山永平寺をはじめ、愛宕山、城山、浄法寺山、吉野ヶ岳、九頭竜川、美しい田園、そして、あまり知られていないが非常に優れた泉質の永平寺温泉など、自然療法にぴったりな場所が多く存在するからだ。
豊かな自然に恵まれていることは、永平寺町だけでなく、福井県全体にも当てはまる。山も海も温泉も近くにあり、魅力一杯でありながら、手っかずのまま人も自然も懐かしい。
一方で、今後の課題もある。永平寺町環境基本計画の重点課題の一つに「気候療法の実践」が掲げられているが、気候療法に使用する地形療法コースの整備や、腕浴用の水盤、外気横臥浴用の場所の整備等は、地元の方々の協力を得て、緒についたところである。町内に、有資格の気候療法士が誕生することも必須であると彼女は言う。

我に返るチャンスをもらに行け

金山さんは、日本で広く自然療法を知ってもらうために、気候療法士インストラクター育成講習会や、市民公開講座、講演会、自然療法プログラムなど様々な活動も行っている。

研究用のプログラムに参加するのは高齢者が多いが、働く人や学生など若い世代にも自然の中で過ごす喜びをもっと体験してほしいと話している。若者におすすめのコースを伺ったところ、2021年に開通した永平寺町・城山「馬車道コー



金山ひとみ
福井大学 医学系部門 医学領域 国際社会医学講座 環境保健学 助教。ドイツでの事例も参考にし、福井で気候療法の取り組みを行なっている。

text：山田 麗音、渡辺 まどか



心・技・体

激流の上でバランスを保ち、アクロバティックな技を披露するフリースタイルカヤック。永平寺町を拠点にフリースタイルカヤックに打ち込む松永和也さんにお話をうかがった。

水上のロデオ

カヌーには、平らな水面の上でスピードを競う「スプリント」、カヌーに乗ってハンドボールのようにゴールを狙う「ポロ」など様々な種目がある。

その中でも、松永さんの専門であるフリースタイルカヤックは「水上のロデオ」と呼ばれている。激流の中で、カヌーに乗ったまま宙返りやアクロバティックな技を披露するのだ。

既存のワールドカップや世界選手権だけでなく、オリンピック種目への採用も目指しており、今後の更なる盛り上げが期待される。

松永さんとカヌー

幼少期に参加した親子カヌースクール。そこでの出会いが、松永さんがカヌーを始めるきっかけだった。本格的に競技を始めたのは、大学生になってから。それまでは、趣味として川下りを楽しんでいたそう。

カヌーが松永さんにとって、趣味から競技へと変化した裏には、かねてから抱いていたフリースタイルへの憧れがあった。また、カヌーを楽しめる場所は限られており、大学生になって行動範囲が広がったことも要因の1つだったそう。

永平寺町からメダリストを

永平寺町を流れる九頭竜川の豊富な水量に注目した松永さん。この川にフリースタイルカヤックの競技場を作れないかと閃いた。

そんな松永さんの熱い思いを形にしたのが、2021年5月にオープンした「ナミノバ」だ。クラウドファンディングで費用を募り、カヌー、そして永平寺町を愛する仲間たちと共に作り上げた。

「ナミノバで練習して大会でメダルを獲る」

これが現在の松永さんの目標である。また、ナミノバを通して、もっとたくさんの人たちにカヌーを広めていきたいと意気込んだ。

松永さんの「ととのう」

松永さんにとって「ととのう」とは、バランスをとることだ。バランスをとることは、普段の生活だけではなく、激流の上で行うフリースタイルカヤックにおいても、欠かせないポイントである。

「来たものを受け入れつつ、我を通す」

他者との繋がりの中で、フリースタイルカヤックのさらなる普及を目指し、競技者として、激流を受け入れアクロバティックな技を繰り出す。松永さんを象徴するとても深いのある言葉だった。



松永 和也
「水上のロデオ」と呼ばれるフリースタイルカヤックで何度も日本一に輝く。選手として活動する傍ら、永平寺町にカヌーの競技場をオープンさせるなど、競技のさらなる発展に尽力している。

7 text：高間 大登、森川 敬生

「好き」を仕事にする

永平寺町の景色を楽しみながら最高のコーヒーを楽しむことができる COZY COFFEE。このお店を営む林浩治さんにお話を伺った。

COZY COFFEEを始めたきっかけ

もともとはアパレルの営業として25年間働いていた林さん。しかし、他人が作った商品を売るのではなく、自分が作ったものを直接お客様に楽しんでもらいたいと思い、一念発起して脱サラ。「自分自身にしかできないことがしたい」、この目標を掲げた末、たどり着いたのが「コーヒー」だった。コーヒーは焙煎によっていろいろな味を作ることができる。そして、ほかの人には真似できないようなブランドを作りたいと思ったことがきっかけだったと話す。「他人の人生を歩むのではなく、自分の人生を歩みたい」と思い決断したのだという。お店は「居心地のいい」という意味「COZY」と林さんの名前である「こうじ」とをかけて名付けた。

永平寺町のかかわり

林さんはコーヒーを通して永平寺町を楽しんでもらいたいと話す。そのため、アパレルの経験を活かし、多くのお客様に知ってもらうためにはブランドを作る必要があると考え、オリジナルブランド「精進」と「浄め」を立ち上げた。「精進」という名前は、正に自分自身が50歳で脱サラして一口を浄め、精進する、という思いで付けた。「浄め」は店の近くにある浄法寺山の「浄めの滝」を訪れ、マイナスイオンを感じて女性に優しいノンカフェインを作ろうと思い名付けた。普段はお店の営業のほかにも現地に来られない人に永平寺町とコーヒーを楽しんでもらおうとインスタグラムなどのSNSに永平寺町の風景を投稿している。

林さんにとっての「仕事」とは

仕事を「遊び」としてとらえている林さん。自身の好きなことを仕事にすることで、仕事というものを苦に感じず、今を充足させることができる。「今の人たちは自分の意志よりも資本主義によって敷かれたレールに乗ってしまいがちです。その瞬間、瞬間、自分自身を充足させ、個性を発揮させることができる物事を自分自身で見つけ、今敷かれているレールから脱却することが必要だ」と林さんは話す。

林さんにとっての「とどのう」とは

「とどのう」とは、今生きているうえで充足していること」と語る林さん。嫌なことや苦手なことは自分一人で無理せず、それを得意とする人と協力して行うことが重要だという。そうすることでモチベーションの高揚を保つことができ、「好き」なものに集中、そして熱中することで、自分自身を充足させることができる。



林 浩治
永平寺町にあるコーヒーショップ「COZY COFFEE」を営む店主。コーヒーを通じて永平寺町の魅力を発信している。

text：角井 柊斗、橋爪 周吾

住民の願いを叶える近助タクシー

永平寺町内の志比北・鳴鹿山鹿地区で運行している住民参加型の自家用有償旅客運送「近助タクシー」。今回は志比北地区振興連絡協議会の川崎直文さんと、実際にタクシーを利用している方々に話をうかがった。

とどのうの場

住民参加型の自家用有償旅客運送である近助タクシー。そこには住民ドライバーが住民を送迎するという、地域での助け合いがある。近助タクシーがあることで利用者のコミュニティが広がり、支え合いの地域づくりが実現可能になる。

こだわりぬいた近助タクシー

近助タクシーは定員7人の自家用車だ。特徴は乗降口にステップや手すりがあり、乗り降りが便利な点である。実際に利用している方からも「杖があっても乗りやすい」「乗降口だけでなく車内にも手すりがあり使いやすい」という声を聞いた。

また近助タクシーには、地元の志比北小学校の児童が描いた風景画がイラストされている。「見た目が派手な分、すぐ目にとまりわかりやすい」と笑う利用者の方。地元の小学校も含め、近助タクシーは地域の人に愛されていると感じた。

近所の助け合い

近助タクシーは自宅と目的地を送迎する、ドアツードアの運行をしている。運行範囲は、地域が継続して運用できる適正規模の永平寺町内。この運行方法をとることで、主に移動や買物の支援を行う。

利用形態は予約して乗り合う「デマンド型タクシー」。普段通っている福祉施設や病院からの予約も可能だ。定員オーバーの際には利用者の方に

も協力をお願いすることで成り立っている。乗り合うことで近所の人と会話が弾み、今では「近助タクシーグループ」「近助タクシー家族」などができるあがるほどだ。実際にご飯会を行っているうえで、近助タクシーが地域のコミュニケーションの場になっている。

ドライバーは地域住民の有償ボランティア。ドライバーは地域見守りを兼ねながら、移動支援を行い支え合いの地域づくりに励んでいる。

近助タクシーがもたらす「とどのう」

近助タクシー運行に携わっている川崎さん、そして実際に利用している方にとって「とどのう」とは、ただ人を運ぶだけでなく近助タクシーを通じて生まれる「とどのうの場」があることだ。近助タクシーは、田舎だからこそできる交流の場を作り、人と人とを結びつけている。それと同時に、幸せな効果も生んでいる。



川崎 直文

永平寺町議会の議員であり、近助タクシーの実施地域である志比北地区振興連絡協議会・会長。近助タクシーのドライバーとしても活躍している。



9 text：中出 和花、藤井 愛、松本 美咲



移住サポーターの仕事

移住サポーターは、福井に興味がある人の相談にのり、永平寺町の魅力を発信して移住に繋げること。現在、FacebookやInstagramを活用して魅力・情報を発信している。

十九年の経験をもとに

19年間、福井の地を離れ、東京とアメリカでジュエリーデザイナーとして活躍。娘さんの誕生を機に、永平寺町に移住し、そこで永平寺町から移住サポーターに推薦された。移住サポーターの仕事は、アメリカと東京での経験・感じた気持ちが生かされている。

「福井っ子だけと福井の感覚を忘れていたので、都心部の人の気持ちに寄り添えるんです。都会の人が田舎に来るときの気持ち、不安な気持ち、何を期待しているのかが分かる」と語る。

コロナが明けたら

積極的に情報を発信し、永平寺町の魅力を多くの人に伝えていく山崎さん。

現在、新型コロナウイルスの影響で思うように活動が出来ていないなか、収束したらどのように活動していきたいのだろうか。

「移住サポーターという名前だけに、移住したい人の心のサポートもそうですが、困っていることを橋渡しするようなことは丁寧にやっていきたいと思っています」



若い世代へ

「外の世界をたくさん見て、考える機会を自分に与えてほしい。いろいろな人と出会い、活動の幅を広げ、より多くの景色を見てほしい」と山崎さんは語った。

山崎さんの「ととのう」

山崎さんの永平寺町で過ごして感じる「ととのう」とは、永平寺町の生活そのものだ。

「家族がいて、仕事もあって、おいしい食事がある。全部のバランスでやっぱり整っていると思います」

山崎さんは自分自身で「ととのう」環境を作りながら多くの人と永平寺町を繋げていく。

山崎 チャナ 智美

永平寺町移住サポーター兼ジュエリーデザイナー。ジュエリーデザイナーとして活躍しながら、永平寺町に興味がある人の相談に乗り、永平寺町の魅力をSNSで発信している。

text：勝木 ひかる、山腰 結唯

永平寺町に住んで感じた「ととのう」

- ところに寄り添いととのえる -

自然あふれる場所「永平寺町 四季の森 複合施設」で永平寺町の移住サポーターとして活躍する山崎チャナ智美さんに話を伺った。

助け合い、つながる永平寺町

永平寺町役場本庁の総合政策課で働かれている伊藤聡一さんにお話を伺った。

地域に根づいた取り組み

「公務員は人が好きじゃないと務まらない」と伊藤さん。永平寺町では、役場と地域との距離が近く、直接感謝や要望など様々な声が届きやすい。「人とのつながり」を大切にし、日常的に発生する問題を役場が町民に寄り添い解決していくことで、地域に根づいた役場、町民とのつながりが深い町が生まれ受け継がれていく。

永平寺町の今

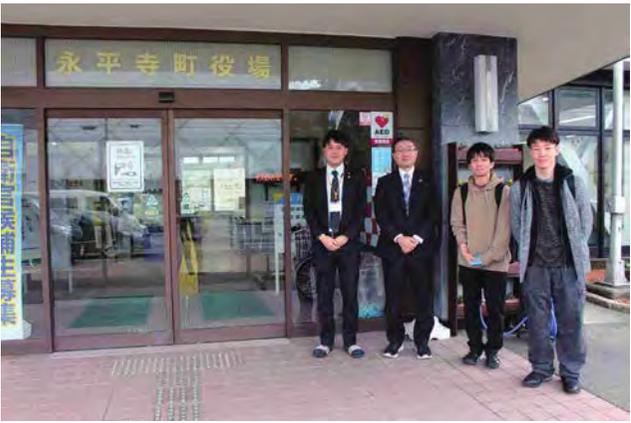
永平寺町では約6年前、町から転出していく人のほうが約100人多かった。しかし、その転出と転入の差は年々小さくなり、ついに昨年は、永平寺町への転入が多くなった。伊藤さんは「永平寺町の人とのつながりがある温かい雰囲気魅せられて移住してくれている」と語った。

永平寺町は移住者の増加や魅力の向上を目指し、子育て支援、空き家の紹介や移住希望者の相談に対応するなどの活動を行っている。実際に移住した方の支援も地域と連携して行い、永平寺町を盛り上げていきたいそうだ。

永平寺町の未来

今後の永平寺町について伊藤さんは「みんなが笑顔でつながれる町にしたい」と語った。

少子高齢化社会を迎え、国による自動運転実証、近助タクシーの取り組み、町立在宅訪問診療所の運営も進めている。また、人口約18,200人の



伊藤さんにとっての永平寺町の「ととのう」

「いろいろなもの同士がつながり合い、みんなが笑顔で活躍できる町」それが伊藤さんにとっての永平寺町の「ととのう」であり、伊藤さんは「この永平寺町を守っていくこと、住民の皆さんの想いをつなげていくことが自分の仕事」だと語った。永平寺町は人のつながりが深く、ぬくもりを感じることができる町である。これからも、永平寺町の温かな雰囲気に魅力を感じて多くの人が訪れ、多くの「つながり」が生まれるだろう。

伊藤 聡一

永平寺町 総合政策課 課長補佐。永平寺町民が笑顔でつながれるまちづくりに町役場職員として積極的に取り組んでいる。





禅に親しみ、ととのう

禅の世界を体験できる施設、永平寺 親禅の宿 柏樹關。そこで大本山永平寺認定の“禅コンサルジュ”として働く久保田さんに話をうかがった。

久保田 真美

永平寺 親禅の宿「柏樹關」の大本山永平寺認定“禅コンサルジュ”。座禅体験や朝課の引率等を通して、永平寺とお客様の橋渡しを行っている。

じっくり永平寺を見定める

禅コンサルジュとして働く中で、新たな永平寺の魅力に出合った久保田さん。柏樹關に訪れたお客様には、久保田さん自らが行って良いと感じた場所やお店をおすすめしている。普段の時間の流れから自分を解き放ってじっくり永平寺を見てみると、今まで気づけなかったいろいろな発見があるそう。

永平寺門前町には、昔の部分を残しつつ新しいものも取り入れているところに可能性を感じているという久保田さん。「常に新しく変化するのではなく、残すべきものを失ってほしくない」と語る。

久保田さんの「ととのう」

久保田さんにとって「ととのう」とは、時間の流れやあわただしい生活に惑わされずに自分自身と向き合う「内観の時間」を過ごすことだ。

「仏教には生きていく上での哲学、生きるヒントがあります。自分の心に合った答えが隠れているので、それを禅に触れることで見つけていただきたい」と親禅を通した「ととのう」ための手段を教えてくださいました。



text：渡辺 まどか

永平寺町ビジョンガイドブックができるまで

永平寺とお客様の橋渡し

「禅に親しむ」をコンセプトにする親禅の宿 柏樹關。そこには尼僧さんと3名の禅コンサルジュがいる。その仕事は訪れたお客様と永平寺をつなぐことだ。柏樹關に「關」の字が使われているのはここに理由がある。

「私たち禅コンサルジュはお客様と永平寺の橋渡しをすることです。禅やお寺に敷居の高さを感じている方々をサポートします」

実際には永平寺町での座禅体験や朝課の引率、館内「開也の間」での座禅体験の指導などを行う。

永平寺の空気感

福井出身である久保田さん。幼いころは、永平寺に怖い場所という印象を抱いていたそう。しかしその印象は、永平寺の修行を体験する「参籠」を経験して全く変わった。

「参籠の時は永平寺の空気感が変わりました。日常生活と全く違い、異空間に来たみたいでした」

永平寺を多くの人に伝えるために

久保田さんが禅コンサルジュになったきっかけは偶然みかけたスタッフ募集の案内。



-1-

オンライン授業で永平寺町学をスタート！



-2-

一人ひとりの自己紹介からはじめました



-3-

永平寺町について学ぶ、はじめての機会



-4-

インタビューと記事の書き方を学びました



-5-

スマホの撮り方を学ぶ
グッといい写真が撮れるように！



-6-

スマホで集合写真をパシャリ☆



-7-

インタビューの方法を実地観察
なるほど！の連続



-8-

インタビュー授業の集合写真
こちらもパシャリ☆



-9-

永平寺町の各地に
インタビューをしに飛び込んだ



-10-

やっぱり生の言葉や現場から
感じるものがいっぱい！



-11-

人から学ぶことの大事さを肌をもって体感



-12-

ビジョンガイドブック完成に向けて
推敲作業に励みました



淡海 尋斗
自然に触れて人生を楽しむこと



矢野 智士
生きがいを感じられる瞬間を大切にすること



藤井 愛
人と触れ合うこと

渡辺 まどか
よく寝てよく食べる
規則正しい生活によって、心と体が健康であること



山田 麗音
仲間と悲しみや喜びを共有すること



水島 莉歩
友達や家族とお出かけすること



小山 夏輝
家族や友達との時間



橋爪 周吾
今を全力で楽しんで生きること



森川 鼓生
散歩が心安らぐ時間であり、ひいてはととのいである

インタビューを終えて、
私たちが考える
「ととのう」とは



高間 大登
生き物の成長を見届けているとき

中出 和花
目的地を決めずに友達とドライブをするとき



小坂 みく
ゆっくりと時間をかけて、自分が落ち着く空間で一つの物事に集中して取り組むこと



山田 遼河
元気で自分のやりたいことができること



角井 柊斗
好きなことをして過ごすこと

山崎 伶馬
自然の美しさを感じることに



勝木 ひかる
咲く場所も咲き方も自分で決めること



山腰 結唯
毎日を健康に笑顔で過ごすこと

松本 美咲
友達と楽しく話しているとき

